

# 栽培漁業技術開発調査(マツカワの種苗生産)

共同研究機関(協力機関): 京都大学大学院 (北海道栽培漁業振興公社)

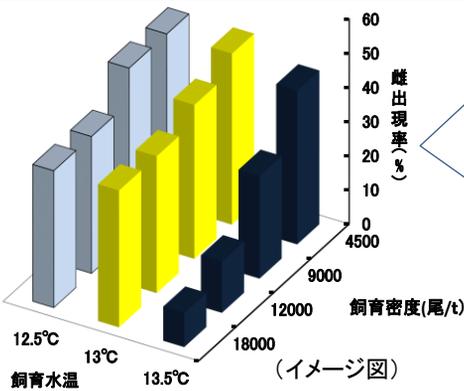
## 研究の背景・目的

- ・伊達センターではマツカワ放流種苗をほぼ安定的に100万尾生産しているが、これまで適正と考えられていた水温(14℃)では性比が雄に偏ることや新たな形態異常(脊椎彎曲)が出現するなど、解決すべき課題が残されている。
- ・今後、マツカワ栽培漁業を持続可能とするために、放流魚の再生産効果向上や種苗生産・放流の経費の削減に向けた取り組みが必要である。
- ・そのために、適正な性比を有する種苗の生産、生産コストの低減、放流サイズの小型化が求められており、これらの課題に対応した種苗生産方法に技術改良する。

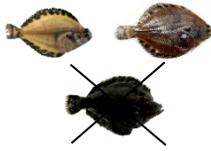
## 研究内容

### ①改良型健苗生産方法の検討

- ・雌の出現率が低下せず、白化以外の形態異常ができるだけ少ない水温と飼育密度の組合せを探索する。



性比が雌雄1:1となり、白化以外の形態異常が少なくなる水温と飼育密度で生産



形態異常を極力白化だけにできれば、選別の効率化が可能  
→ 50mm・100万尾の生産作業を軽減



### ②新たな形態異常(脊椎彎曲)の要因解明と防除対策の検討

- ・出現率や発生ステージなどの実態を把握する。
- ・発生要因の解明を行い、防除対策を検討する。

これが漁獲されると魚価の低下が懸念

出現率等の実態が不明

現状の選別(30mm)では識別が困難

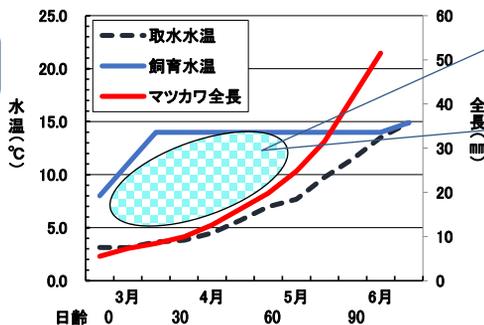
伊達センターにのみ発生



発生要因を解明できない場合でも30mmサイズでの識別方法を見出せば、選別除去は可能

### ③省エネによるコスト削減飼育の検討

- ・加温飼育をして生物餌料を給餌している期間に、どこまで換水量を削減して飼育できるか検討する。



取水温と飼育水温の差が大きいので、換水量を削減できれば、省エネルギーが可能。



## 期待される成果

種苗が適正な性比を有し、かつ形態異常の出現を抑えられる飼育技術に改良される。コスト削減に向けた技術に改良され、生産単価を下げる事が可能となる。

## 研究成果の活用

持続可能なマツカワ栽培漁業の成立に活用される。